

50年目の総括

渡辺邦夫 1952年（昭和27年）1月10日生まれ

今日50歳の誕生日を無事迎えることができた。子供の頃イメージしていた50歳は、顔が脂ぎっていて、ポマードの匂いがぷんぷんする「オヤジ」って感じだった。でも自分が実際50になってみると、何故か、自分の気持ちと言うか、精神年齢は30代でストップしたままという気がするし、実際鏡に自分の姿を映して見ても30代にしか見えない。ずうずうしいと言われてもこれは、極めて個人的な率直な感想であって、みんなに強要するつもりは無いので、許していただきたい。若く見られたいと思った事は無いし、実際の歳より若く見られて嬉しいと思った事も無い。自分のこれまでの生き様が、精神と肉体に様々な影響を与え、50年を経た今の自分が存在すると思っている。

おかげさまで好きな事をやりたいだけやって来たが、道を踏み外す事も無く、今とても幸せな日々を送らせてもらっている。整形外科医というのも私の性に合っているような気がする。何気なく選んだと言っては語弊があるが、大体において、医師という職業を選んだのも、高校3年3学期の3者面談の前夜だし、割と簡単に人生の大事を決めてきた気がする。もちろんその時は非常に真剣に考え抜いた末だったとは思いますが、誰に相談することもなく一晩で決めた事も多い。にもかかわらずこれまでの人生で、何十回となく大きな決断を迫られる場面があり、いま振り返ってみると、そのことごとくすべてに正しい選択をして来たと思う。これを可能にして来たのは、もちろんラッキーだったケースもあるが、「バランス感覚」と「勘の良さ」だったと、自分では確信している。最近特に職員、患者さんをはじめ、出入りの様々な人達から、尊敬され、慕われているのを常に肌で感じながら毎日の時間が流れている気がする。（ちょっと1人よがりの妄想かなあ？）人に、誠心誠意、親切にしてあげて、心から感謝され、「おかげさまで！」、「ありがとう！」と言う言葉を毎日毎日聞きながら流れる時間は、結構快適なものである。「40過ぎたら自分の顔に責任を持って！」と言うけれど、こんな生活を毎日やっていたら、徐々にいい顔になって行くのは当然かなと思う。今とても幸せだなと感じるのは、「信じられぬと嘆くよりも、人を信じて傷つくほうがいい」と歌った、武田鉄矢ではないけれど、「人を信じられる」ということかと思う。人の言うことを素直に受け入れる。皮肉っぽく、斜に構えて、裏を探りながら聞くのではなく、心から、ストレートに相手の言葉に耳を傾けることができる自分がとても幸せだと思う。自分はこれまでずっと本音で生きて来た。腹芸を得意とし、建前ばかりでなかなか本当のことを言わない日本人社会の中では、誤解されることも多く、時には落ち込んで、本気で欧米へ移住することを考え、計画を進めていた時期もあった。しかし最近自分のようなタイプの間が日本の中でも徐々に増えてきており、彼らがトップに立つケースも目につく様になって、以前よりは大分過ごし易くなって来たと感じている。自分の考えをしっかりと相手に伝え、相手の意見も良く聞き、真正面から向き合ってディスカッションする。

結果出て来た結論には納得して従う。とても簡単な事だと思うのだが、これが出来ない人がとても多い。その場ではだんまりを決め込んでいて、後でぶつぶつ文句を言う類である。

この頃、みんないい人ばかりだなあと思うことが多い。もちろん悪い人も中には居る。でもそんな人にも必ずいい所はある。その人が自分に対してその良いところを出してくれたら、自分にとってその人はいい人になる。いつも思うのだが、他人は自分を映す鏡であると考えるようにしている。自分の持っている嫌な部分で相手に接すれば、相手も自分の持っている嫌な部分でこちらに対応して来るのだと思う。つまり相手が悪い人なのではなくて、自分の提示した嫌な部分に反応したに過ぎないのだと思う。善良で、親切で、人を疑ったりしない、いつも笑顔の絶えない人に対して、意地悪をしてやろうと思う人はあまりいないだろう。

私の究極の目標は、「わたなべ整形外科」と何らかの関係を持った人すべてが幸せになることである。職員として、患者さんとして、出入りの業者として、その他様々な形でうちの病院と関わるすべての人が幸せになることを常に目指して努力しているつもりである。今の院内に流れる、いい意味での緊張感を、私はこれからも大切にして行きたいと考えている。私が手を抜けば、職員もいずれ手を抜くようになるだろう。診察の時、私は患者さんに説明をしながら、常に、周りに居る職員を教育しているつもりである。私の医療に注ぐ情熱が職員に少しでも伝われば、彼らも意気を感じてくれると信じている。私は常に、「頑固オヤジ」として確固たる信念を掲げ、安易な妥協をせず、患者さん本位の医療をこれからも頑なに、そして地道に展開して行こうと考えている。足利およびその周辺地域に住む人達にとって、いつも安心してかかれる、駆け込み寺のような存在になりたい。とりあえずあそこに行っておけば安心だと言ってもらえる様になりたい。そして、足利の人にお国自慢の1つとして、「うちの街にはこんなすばらしい病院があるんだぞ。」と、他の街へ行った時、取りあげてもらえれば私にとって最高の勲章だと考えている。

最近、大前研一氏の言っていることが以前よりも実感として理解できる気がする。「職業人」「家庭人」「社会人」「個人」、人間には4つの時間と生き甲斐、そしてその向こう側にそれぞれに対する責任があると言う彼の主張はとても共感できる。院長としての責任（最高水準の医療を、わかりやすく丁寧に患者さんに提供しているかどうか、職員の待遇はどうか）、夫、父親として家族に対してきちんと責任を果たしているかどうか、社会人として、地域社会とどういう関わりを持ち、どの程度の社会貢献をしているか。こういう責任をすべて果たした上で、どんなに忙しくても自分のプライベートライフ＝「遊ぶ」時間を確保することが重要であるという彼の考え方は、自分の目指す方向と一致していると考えている。今後数年の間は、不況が益々深刻化し犯罪も増え、社会情勢はかなり悪化することが予想されるが、常にバランス感覚を失わず、冷静に世の中を見つめ、正しい判断が下せるように、心と体の健康管理を徹底しようと考えている。

2002年1月10日